

コメントA：佐々木倫子（日本語教育・英語教育の立場からの要望）

国内の日本語教育と英語教育

佐々木 一月ほど前なのですが、文化庁の協議会の分科会で「英語教育と日本語教育の連携を考える」というテーマを与えられました。そこで、そのことを考える機会があったものですから、少しそのことを含めて話をさせていただきます。私のレジュメを見ていただきますと、非常におおざっぱな形で国内の英語教育と日本語教育を対比しております。ここに書いてあります英語教育というのは、主に公立の中・高で行われている英語教育というものを頭に置きました。一方、第二言語としての日本語教育という方は年少者に必ずしも照準を当てたものではないのですが、いわゆる国内の日本語教育というものを頭に置きました。この2つを見ますと、あまりにも性格が違うんですね。かけ離れた性格を持っているわけで、とても連携というようなことは考えられないような感じがするわけです。これまでの英語教育と日本語教育の連携というのを考えますと、連携というよりもむしろ外国語教授法理論とか、あるいは英語圏の研究成果というものを日本語教育の方で取り入れるという形の、むしろ日本語教育が英語教育から影響を受けるという形の一つの連携というものがあったと思います。しかし、今現実に実践の場でどういう連携がとれるかということになると、非常に難しいのではないかと。

コミュニティ・コミュニケーション

ところが、今まさに英語教育は少しずつ変わってきているということがあります。同じ分科会で英語教育の立場でということと、神田外語大学の松本先生が御意見を述べられたのですけれども、その時に「英語教育は変わらなければいけない。英語教育の現場が日本語教育に学べる点は多い。まず、コミュニティ・コミュニケーションというものを考えるべきだ」というようなことをおっしゃいました。それは、こういうことです。

英語教育、使える英語、コミュニケーションというと、一挙に留学というふうになってしまうけれども、そうではない。一挙に留学ではなくて、地域の外国人とのコミュニケーションの場をもっと英語教育でも重視すべきで、中学校、高校の先生方は子どもたちを外国人との交流に連れ出すということを考えるべきではないか。そこで、英語でもいい、日本語でもいい、母語を同じにしない人とのコミュニケーションを持つという、そういうところから、ことばというのはコミュニケーションの手段なのだということを実感する、そちらに繋げていってはどうか。そういうことを考えると、非常にこの連携というものが出てくるわけです。

日本人の言語教育観

ところが、この表（資料1）を見ている限りでは、コミュニケーションの手段の教育とか、実践的であるという形で第二言語としての日本語教育が大変素晴らしいように見えて

しまうのですけれども、現実論の話で、教師養成に関わっていると、先ほどの西川さんのお話にも関わってくるかと思えますけれども、日本人に時に見られる言語教育観が目につきます。例えば、地域に住む外国人へのボランティア教育の教師の方たちの養成に多少関わっているといった研究者仲間からも聞くのですけれども、普通の日本人の方がこれから日本語を教えようというとき、ある種の傾向が見られます。あるいはまだ日本語教育の経験が浅いという方の教育実践というものを拝見すると、いくつか特徴が出てきます。その第一が教科書依存です。これは、今甲斐雄一郎さんが素晴らしい説明をなさったので、何も付け加えることはないのですが、ともかく、日本語教育の現場に今まであまり教えてらっしゃらなかった方が関わるということになりますと、まず教科書なしには考えられない、教えられないのですね。教育となると、突然生きた日本語ではなくて、まず教科書というものをお探しになる。「文部省検定というのはないのですか」という声も昔は聞いたのですけれども、今でも「普通使われている教科書、だいたいいつも皆が使う教科書は何ですか」はよく聞きます。そして、それを手に入れると、今度はその通りになさろうとする。あるいは、目の前の学習者とその教科書が対象としている人とが随分かけ離れていても、学習者を教科書に当てはめようとする傾向が強いということなのです。

それから、第二の特徴として、言語形式だけでもないのですが、ともかく形式依存型であることが挙げられます。例えば、文型なら文型で正しいものを言わせようとすることに非常に注意しますし、会話では、自分が考えていることを言うというのではなくて、教科書に出ている会話を暗記するというような形に終始してしまうという傾向がある。

3番目の傾向として、一斉活動というものをとても重視なさる。今度はこれが、対一の場合ですと、学習者の自立という面も軽視して、教師の方で非常に主導型になって、教師の方で仕切ろうとするところが非常に強い。グループになった場合には、日本の学校の教室文化というものを大変持ち込まれて強調なさるといえることがあるのです。

そういうことを考えた時に、初めは私は日本の英語教育の影響が非常に強くてこういうことが起きているのではないかと考えたのですが、よくよく考えてみますと、その根のところに国語教育というものがあるのではないかと。国語教育というものがかなり日本人の言語教育観というものを形成していて、国語教育にも非常に責任があるのではないかと気がしてきました。

母語としての国語教育

これからのことを申し上げたいのですが、やはり、国語教育というのは言語教育統合の出発点としての役割を担っていると思うのです。ですから、教科の基礎とか土台であるだけではなくて、社会人としての日本人の言語生活というものも含めて、非常に重い役割を担っている、母語としての国語教育というのがあると思うのです。その母語としての国語教育の特徴というのは、最初のおおざっぱな表をかなり統合した部分というのがあると思います。例えば、これからの日本人に対する「ナニ」というのは、美的機能とか、対人関係機能とかいうのにプラス情報機能というのがどうしても強調されるべきですから、いわば、おおざっぱに言えば、両者を併せたようなところもありますし、その「ナゼ」というところに、「受験、教養喚起、知的発達」というのにプラス実践的な目的というのは必

ずあるわけですし、いろいろな意味で統合するということがあるのではないかと思います。

甲斐ム ありがとうございます。続きまして、昨年もお出でいただいたのですが、安西さんにコメントを国語教育の方でお願いいたします。

資料 1

	外国語としての英語教育	第二言語としての日本語教育
ナニ 言語	教養としての、文化紹介としての 教育	コミュニケーションの手段の教育実践的 実践的
ナゼ	受験、教養喚起、知的発達	教師が知らない多様な学習者母語
ドウ	教師と学習者の間に媒介語が存在	集中的な学習者も多く、教室外学習大
ドウ	教室内・外の学習時間が限られる	学習者を出発点に教材準備
ドウ	教師主導型・教科書重視	クラスの学習者数が少ない
ドコ	クラスの学習者数が多い	学習環境が異文化接触の場
ドコ	学習者の文化的葛藤はない	

参考文献

- Tobin, J.J., D.H. Wu, D.H. Davidson (1989) 『Preschool in three cultures Japan, China, and the United States』(3つの文化における幼児教育の場 - 日本・中国・米国 -)
Yale University Press
- 恒吉僚子 (1992) 『人間形成の日米比較』中公審書 1065 中央公論社